

市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

九州電力株式会社鉄塔移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ムシナ遺跡

2000年3月

鹿児島県日置郡市来町教育委員会

序 文

この調査は九州電力株式会社鉄塔移設に伴って行われたものです。

鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターのご指導のもとに調査を実施しました。

今回調査したムシナ遺跡は、南九州西回り自動車道建設に伴い鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査を行なった市ノ原遺跡第1地点の隣接地にあり、埋蔵文化財の包蔵地として考えられていました。

今回の調査は、調査面積約170㎡と少ないでしたが、調査の結果、平安時代を中心に多くの遺物が出土し、当時の生活の一部を伺うことができました。

本報告書を刊行するに当たり、この調査にご協力くださった方々に厚く御礼を申し上げますとともに、町民の方々が今後一層、埋蔵文化財への理解を深めていただくよう、お願い申し上げます。

2000年3月

市来町教育委員会
教育長 江口 英雄

報 告 書 抄 録

ふりがな	むしないせき							
書名	ムシナ遺跡							
副書名	九州電力株式会社鉄塔移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	市来町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	西久保敏彦							
編集機関	市来町教育委員会							
所在地	〒899-2192 鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地 ☎0996-36-3111							
発行年月	2000年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むしないせき ムシナ遺跡	鹿児島県 日置郡 市来町 大里	4636	38	31度	130度	19990909～	170m ²	九州電力株式会社鉄塔移設に伴う埋蔵文化財発掘調査
		12	1	43分 48秒	17分 35秒	19991014		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ムシナ遺跡	包含地	平安時代	柱穴	土師器, 須恵器	墨書土器 転用硯			

例 言

1. 本書は、九州電力株式会社鉄塔移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は九州電力株式会社からの受託事業として市来町が調査主体となり、市来町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆・編集等及び遺物撮影には、市来町教育委員会の西久保があたった。
4. 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
5. 本書に用いた遺物番号は、土器・石器の種類に関係なく通し番号とし、挿図・図版の番号と同一である。
6. 遺物の実測は西久保・坂口・松崎が行った。トレースは西久保・池之上・松崎が行った。拓本は児玉・松崎が行った。

本文目次

序文

報告書抄録

例言

目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 ムシナ遺跡発掘調査の組織	1
第3節 調査の経過	1
第4節 整理・報告書作成作業の組織	2
第2章 遺跡の位置及び環境	3
第1節 位置及び環境	3
第3章 調査の概要	7
第1節 土層について	7
第2節 調査の概要	7
第4章 出土遺構・遺物	9
第1節 出土遺構	9
第2節 出土遺物	9
第5章 まとめ	31

挿図目次

第1図 ムシナ遺跡周辺の遺跡地図	4
第2図 遺跡位置図	6
第3図 東側土層断面図	8
第4図 遺構配置図	10
第5図 土器集中箇所実測図	11
第6図 I～III類土器	12
第7図 IV類土器	13
第8図 石器	14
第9図 土師器(1)	16
第10図 土師器(2)	17
第11図 土師器(3)	18

第12図	土師器(4)	19
第13図	土師器(5)	20
第14図	土師器(6)	21
第15図	黒色土器	22
第16図	墨書・刻書土器	23
第17図	須恵器(1)	24
第18図	須恵器(2)	25
第19図	須恵器(3)	26

表 目 次

第1表	ムシナ遺跡周辺の遺跡	5
第2表	出土土器一覧表	27
第3表	出土石器一覧表	27
第4表	出土土師器一覧表(1)	28
第5表	出土土師器一覧表(2)	29
第6表	出土黒色土器一覧表	29
第7表	出土墨書・刻書土器一覧表	29
第8表	出土須恵器一覧表	30

図 版 目 次

図版1	発掘作業風景他	33
図版2	耳環出土状況他	34
図版3	出土遺物(1)	35
図版4	出土遺物(2)	36
図版5	出土遺物(3)	37
図版6	出土遺物(4)	38
図版7	出土遺物(5)	39
図版8	出土遺物(6)	40

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

市来町教育委員会では、文化財の保存・活用を図るため各開発機関との間で、事業区内の文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を行っている。この事前協議により、大里区内で鉄塔移設工事を実施予定の九州電力株式会社は、実施計画地内の埋蔵文化財の有無について市来町教育委員会に照会した。市来町教育委員会は、実施計画地が周知の遺跡「ムシナ遺跡」内にあることが判明したため、その取り扱いについて九州電力株式会社と協議を行った。その結果、市来町教育委員会は、九州電力株式会社の委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

第2節 ムシナ遺跡発掘調査の組織（平成11年度）

調査主体者	市来町教育委員会		
調査責任者	市来町教育委員会	教 育 長	江 口 英 雄
調 査 庶 務	市来町教育委員会	社 会 教 育 課 長	宇 都 隆 雄
	市来町教育委員会	社 会 教 育 係 長	吉 田 裕 史
	市来町教育委員会	派遣社会教育主事	宮 司 和 弘
	市来町教育委員会	社 会 教 育 課 主 任	芹ヶ野 幸 淑
調 査 担 当	市来町教育委員会	社 会 教 育 課 主 査	新 町 正
	市来町教育委員会	社 会 教 育 課 主 事	西久保 敏 彦

発掘作業員

有 村 満 則・中 原 一 馬・西瀬戸 章・新 村 ヨシエ・篠 原 スミエ
坂 口 百合子・末 吉 キクエ・富 永 節 子・住 吉 京 子・溜 池 ハル子

第3節 調査の経過

発掘調査は平成11年9月9日～平成11年10月14日まで行われ、その経過については日誌抄をもつてかえる。

（日誌抄）

- 9月3日(金) 重機による表土除去。
- 9月9日(木) 作業開始。Ⅱ層掘り下げ。レベル移動。遺物取上げNo1～100
- 9月10日(金) Ⅱ層掘り下げ。遺物取上げNo101～200
- 9月13日(月) Ⅱ層掘り下げ。
- 9月14日(火) Ⅱ層掘り下げ。遺物取上げNo201～300
- 9月16日(木) 遺物取上げNo301～400
- 9月17日(金) Ⅱ層掘り下げ。遺物取上げNo401～671
- 9月21日(火) Ⅱ層掘り下げ。遺物取上げNo672～900

- 9月22日(水) II層掘り下げ。
- 9月27日(月) II層掘り下げ。
- 9月28日(火) II層掘り下げ。遺物取上げNo901～1100
- 9月29日(水) II層掘り下げ。
- 9月30日(木) II層掘り下げ。遺物取上げNo1101～1259
- 10月1日(金) II層掘り下げ。
- 10月4日(月) II層掘り下げ。遺物取上げNo1260～1350 土器集中箇所実測。
- 10月5日(火) II層掘り下げ。土器集中箇所実測。県立埋蔵文化財センター繁昌，西園，三垣氏来跡。
- 10月6日(水) 遺構検出及び掘り下げ。遺構配置図作成。遺物取上げNo1353～1380
- 10月7日(木) 重機によるIV層除去。
- 10月12日(火) IV・V層掘り下げ。
- 10月13日(水) V層掘り下げ。土層断面精査。
- 10月14日(金) V層掘り下げ。土層断面実測。用具整理。調査終了。

第4節 報告書作成組織（平成11年度）

調査主体者	市来町教育委員会			
調査責任者	市来町教育委員会	教 育 長	江 口 英 雄	
調査庶務	市来町教育委員会	社会教育課長	宇 都 隆 雄	
	市来町教育委員会	社会教育係長	吉 田 裕 史	
	市来町教育委員会	派遣社会教育主事	宮 司 和 弘	
	市来町教育委員会	社会教育課主査	新 町 正	
	市来町教育委員会	社会教育課主任	芹ヶ野 幸 淑	
報告書担当	市来町教育委員会	社会教育課主事	西久保 敏 彦	
整理作業員				

坂 口 ひろ子・松 崎 道 子・池之上 えみ子・児 玉 千香子

指導助言者（敬称略）

ラサール学園教諭永山修一，鹿児島県教育庁文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター

第2章 遺跡の位置及び環境

第1節 位置及び環境

ムシナ遺跡は鹿児島県日置郡市来町に所在する。

市来町は薩摩半島の中西部に位置し、日置郡の中では最北端にあたる。北は串木野市、東は樋脇町、南は東市来町と接し、西は東シナ海に面している。

町の大半の地域では、第三紀後半から第四紀更新世にかけての火山活動によって生成された安山岩質の火山岩を基盤層とする。これらの山地は、川上地区の北東部と大里地区の東部が特に険しく、ほとんどは褐色森林土壌におおわれ、水分・養分ともに豊富で、層も比較的厚い。平地は八房川と大里川・重信川の下流に開けている。大里川下流域に発達した三角州の西側は吹上砂丘の北端として砂地の自然堤防を形成し、東シナ海にも接している。これらの河川が形成した三角州の低地が水田として利用されており、更にその支流が形成した谷底低地にも水田が広がっている。

町内の3本の川の川沿いには多くの遺跡が点在しており、そのほとんどは平成3年度に鹿児島県教育委員会が分布調査を行ない発見されたものである。最近の発掘調査などにより古くは旧石器時代の遺跡も確認されている。また、縄文時代後期の南九州を代表する市来式土器の標識遺跡となり、鹿児島県の指定文化財となっている市来貝塚がある。平安時代には「市来」の名が歴史に出てくる。鎌倉時代には市来院が置かれた。また、この時代のものとして、丹後の局関連の史跡も多く残っている。中でも丹後の局の墓と伝えられる墓塔を含む来迎寺墓塔群は鹿児島県の指定文化財となっている。

先に述べた大里川流域に広がる大里たんぼは、町内最大の水田地帯である。毎年8月5～11日の間の日曜日に行われる国の重要無形民俗文化財に指定されている「七夕踊」の舞台となり、当日は多くの観客で賑わっている。

今回調査地は、市来町南部、東市来町との町境に位置しており、標高約40mの東市来町側から続く台地の北端部にある。また、調査地北側は、鹿児島県立文化財センターが平成9年度に南九州西回り自動車道建設に伴い発掘調査を行った、市ノ原遺跡第1地点と接している。

《参考文献》

「市来町郷土誌」、1982年。

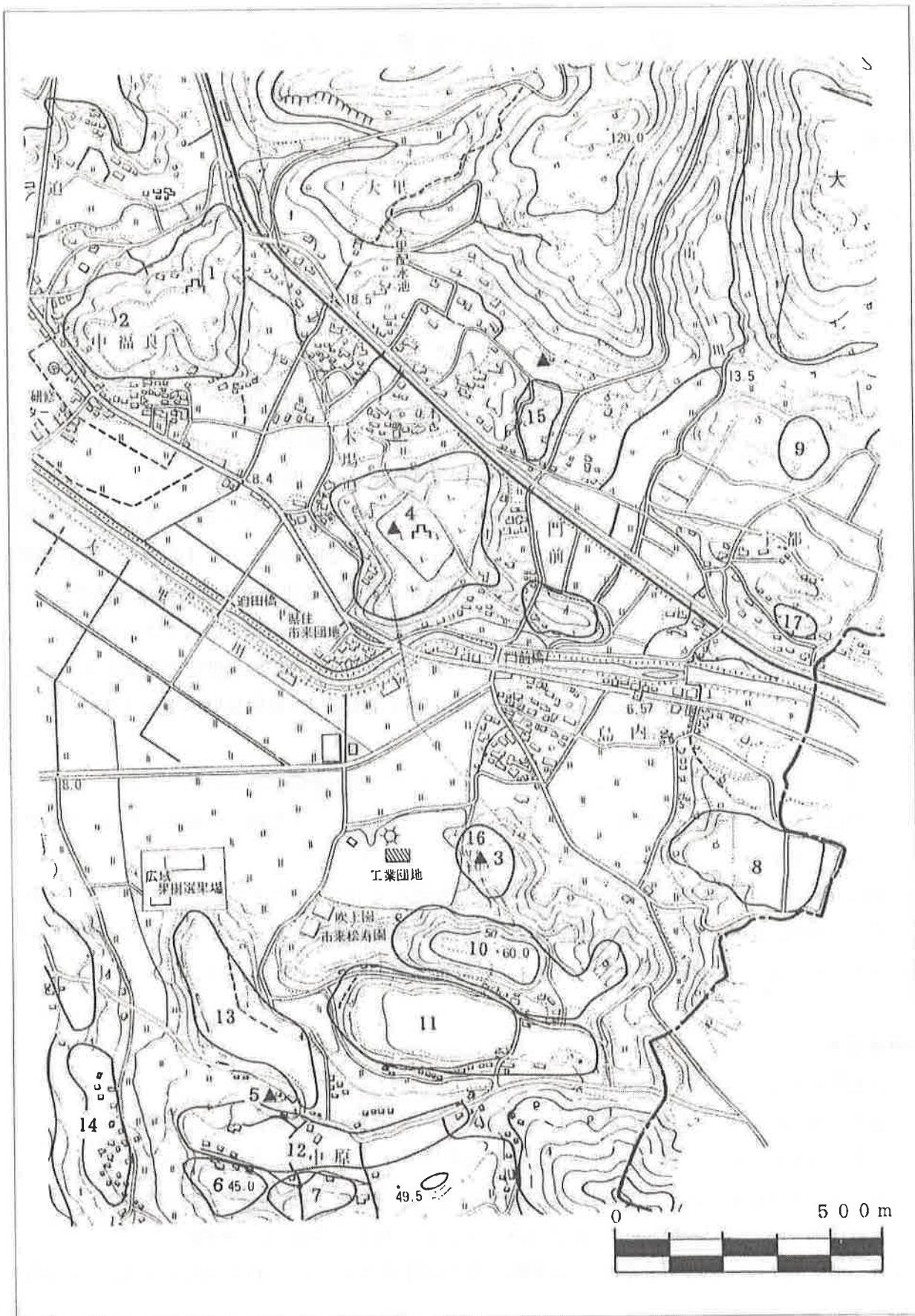
「川上（市来）貝塚」〈市来町埋蔵文化財報告書（1）〉市来町教育委員会、1991年

「川上（市来）貝塚2」〈市来町埋蔵文化財報告書（2）〉市来町教育委員会、1993年

「松尾平遺跡・安德遺跡」〈市来町埋蔵文化財報告書（3）〉市来町教育委員会、1995年

「大里田圃遺跡」〈市来町埋蔵文化財報告書（5）〉市来町教育委員会、1997年

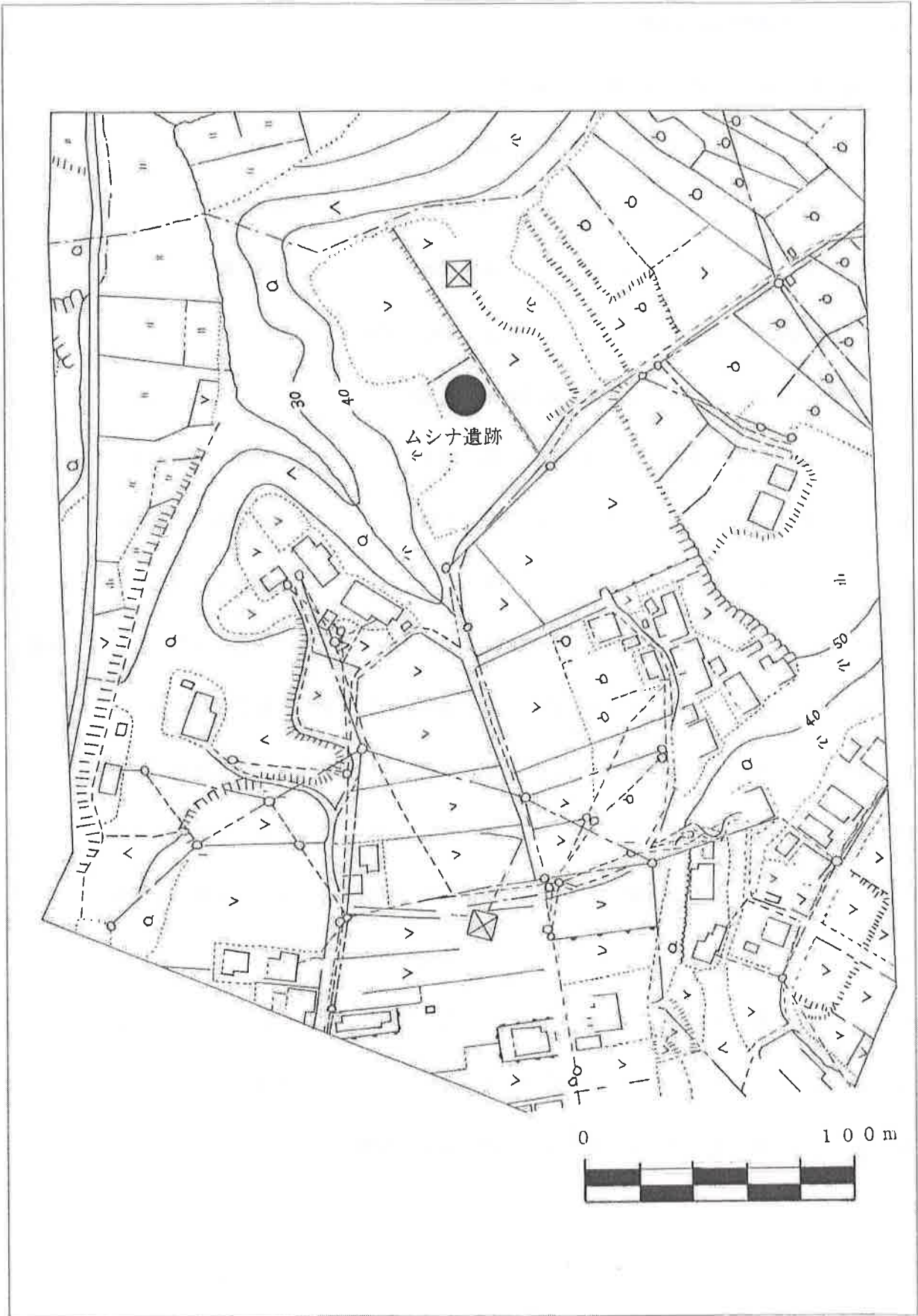
「落シ平・瀧之段・才野ヶ原遺跡」〈市来町埋蔵文化財報告書（6）〉市来町教育委員会、1999年



第1図 周辺の遺跡地図

第1表 ムシナ遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	詰城跡	大里詰城	台地	鎌倉	市来氏
2	上城跡	大里上城	台地	鎌倉	市来氏・土塁
3	鍋ヶ城 (惟宗広言の墓)	大里木場迫	台地	10C~13C	墓塔1基
4	来迎寺墓塔群	大里島内	台地	10C~15C	墓塔
5	中原治水溝	大里中原	傾斜地	嘉永5	
6	下諏訪	大里中原下諏訪	台地	縄文	土器片・打製石斧
7	中諏訪	大里中原中諏訪	台地	古墳	土師器片・須恵器片
8	上ン原	大里島内上ン原	台地		土器片・磨製石斧
9	松尾平	大里松尾平	丘陵	古墳・中世	旧石器・土器・土師器・陶器
10	妙見前	大里妙見前ほか	台地	古墳・中世・近世	土師器・陶磁器
11	東園	大里東園ほか	台地	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
12	西ノ鼻	大里西ノ鼻ほか	台地	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
13	半崎堀	大里半崎堀ほか	台地	弥生・古墳・中世	土器・土師器・陶器
14	上平山	大里上平山	段丘	弥生・古墳	土器
15	本寺屋敷	大里本寺屋敷	畑地・墓地	古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器
16	来迎寺	大里来迎寺	台地	縄文・中世	黒耀石・土師器
17	安德	大里安德	丘陵	縄文・古墳	



第2図 遺跡位置図

第3章 調査の概要

第1節 土層について

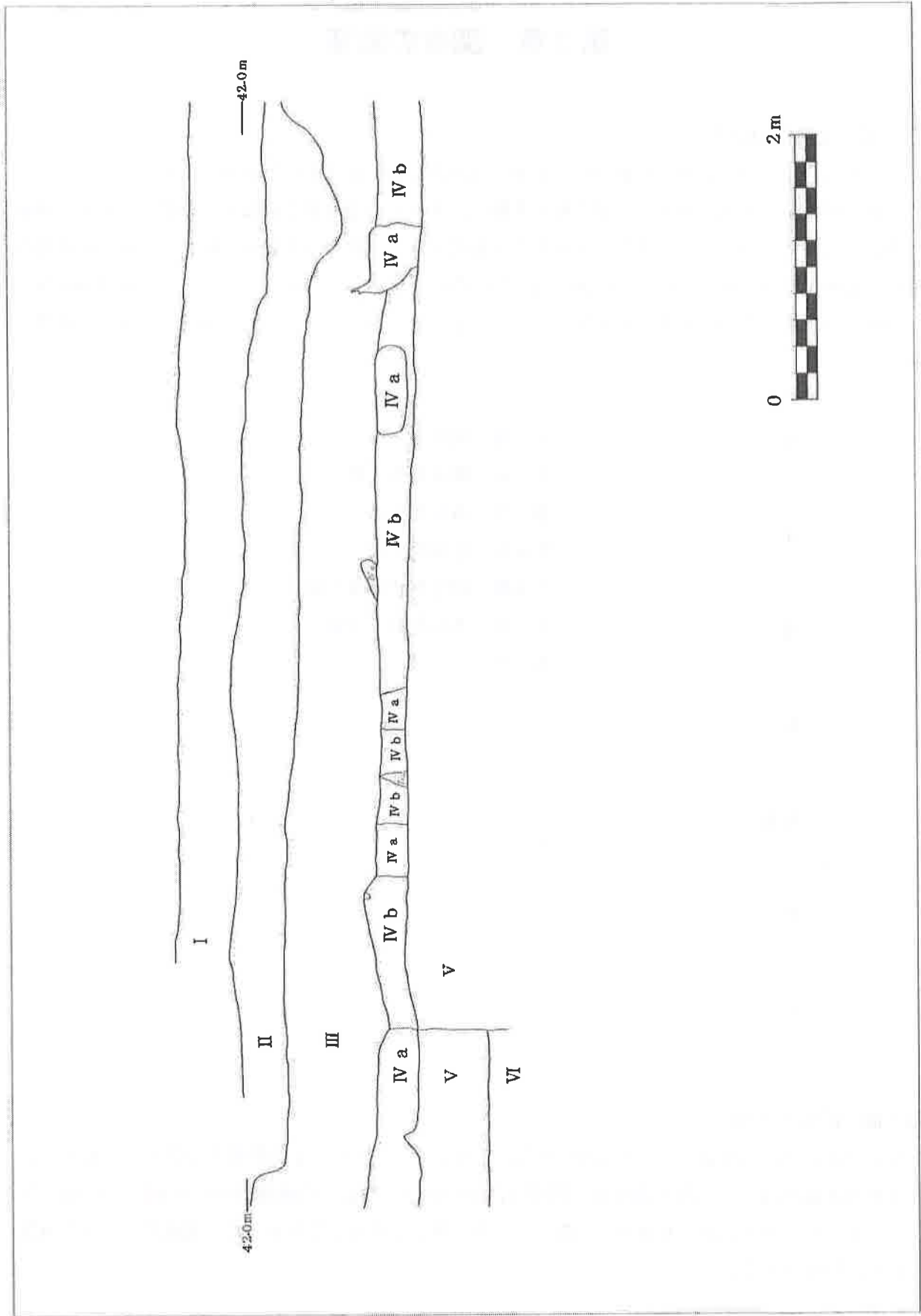
ムシナ遺跡はシラス台地上に位置しており、基本的な層位は以下のとおりである。

I層は耕作土である。II層は、暗茶褐色土層で、すべての遺物がこの層からの出土である。III層は黄褐色土層で鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰である。IV層は黒褐色土層のIV a層と暗茶褐色粘質土層のIV b層に細分される。IV層下部に部分的に黄色パミスが見られるが、桜島噴出のサツマ火山灰に相当するものであると思われる。V層は茶褐色粘質土層である。VI層はシラス火山灰層である。

I	I 層 耕作土
II	II 層 暗茶褐色土層
III	III 層 黄褐色土層
IV a	IV a 層 黒褐色土層
IV b	IV b 層 暗茶褐色粘質土層
V	V 層 茶褐色粘質土層
VI	VI 層 シラス

第2節 調査の概要

今回の調査は鉄塔移設予定地約170m²の範囲で行ない、表土及び無遺物層を重機により除去し、作業の迅速化を図った。出土遺物は、縄文時代から中世の物まで複数時期のものが約1,300個が出土したが、いずれも上記、II層からの出土であり、層による区分はなかった。遺構はいずれもIII層上面で、検出された。



第3图 东侧土层断面图

第4章 出土遺構・遺物

第1節 出土遺構

ムシナ遺跡では、24の柱穴と2つの土壙が検出されたが、遺構内から遺物の出土がなく、遺構の時期は確認できなかった。

上記の遺構のほか、古墳時代の土器集中箇所が検出された。

第2節 出土遺物

出土遺物は、Ⅱ層を包含層とし総数1,380点で、ほとんどが土師器で、そのほか土器、石器、磁器が出土している。

1. 土器

土器はⅠ～Ⅳ類に分けることができた。

1～5はⅠ類土器で、いずれも胴部破片である。1～3は横位・縦位に細い粘土紐を貼付されている。粘土紐が貼付されている部分以外には縦位・斜位に沈線が施文されている。4・5は縦位に粘土紐が貼付され、縦位に沈線が施文されている。

6～10はⅡ類土器で、口縁部破片である。6・7は口唇部が斜めに作られ、2本の沈線を施文され、沈線の間には刺突による施文がされているものである。8～10は無文のものである。

11はⅢ類土器で、口縁部破片である。刻目突帯が施文されている。刻目はヘラにより、斜めに施されている。内面の調整はハケナデである。外面は目の細かいハケで、突帯の上端から上に掻き上げた後、ナデにより消してある。

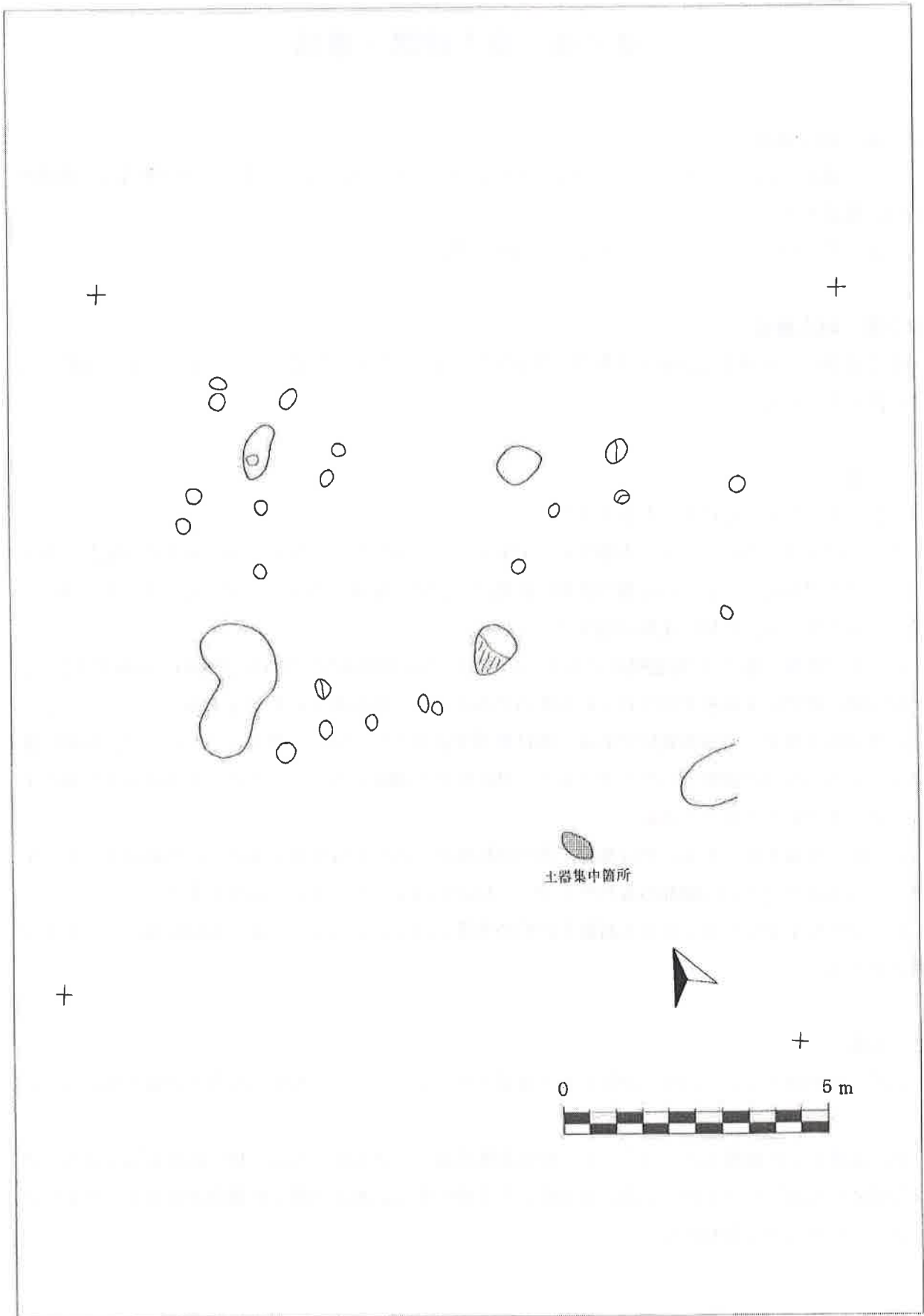
12～15はⅣ類土器である。12は壘形土器で口縁部がくの字に外反するもので、外面はすべてハケナデ、内面は外反する口縁部のみハケナデで、ほかの部分はヘラナデの調整である。

13・14は左下がりの刻みがある断面半円形の突帯が貼り付けられている。15は底部でハケナデの調整である。

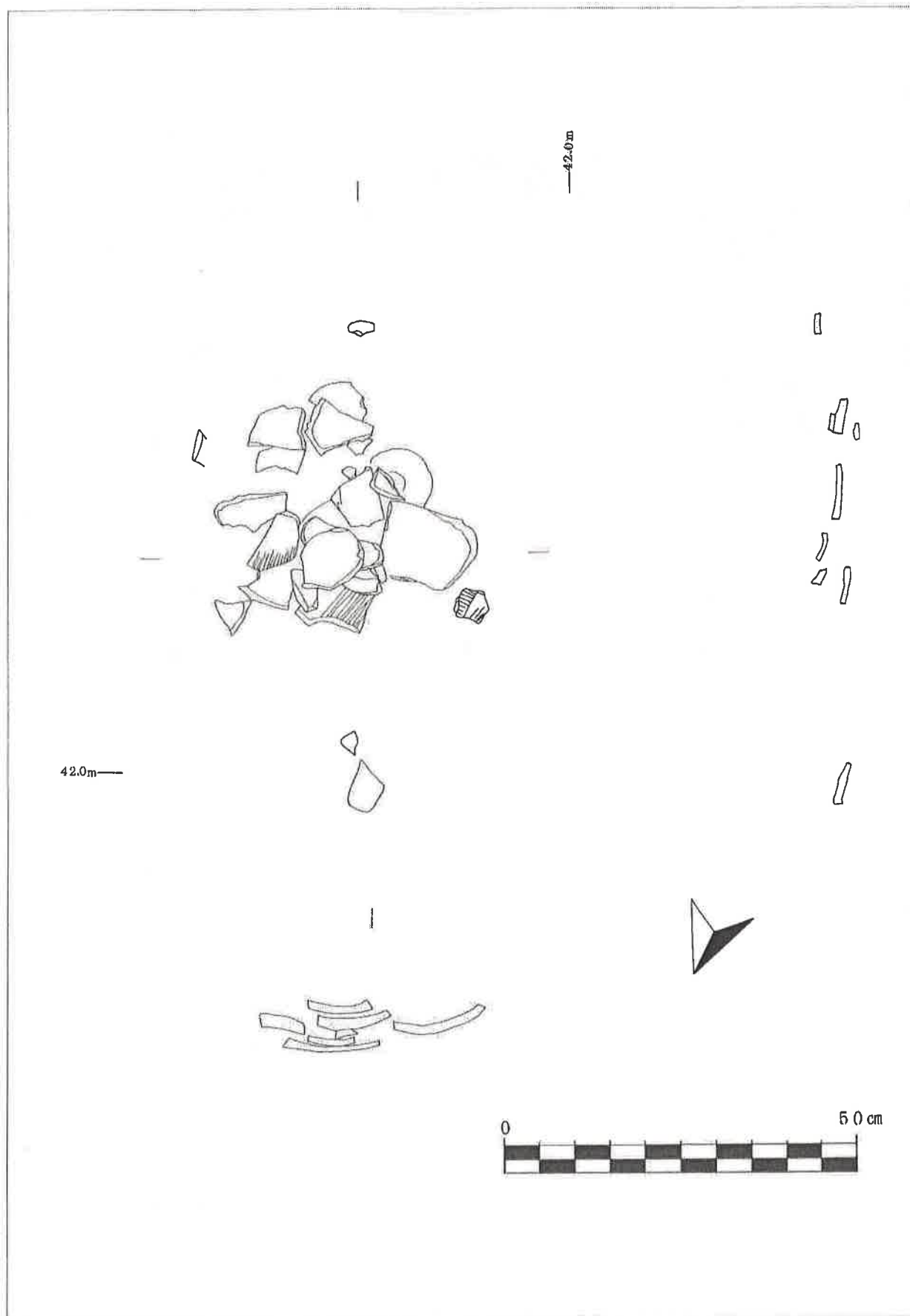
2. 石器

石器は5点出土した。石鏃・磨製石斧・打製石斧である。その他黒耀石片などが数点出土している。

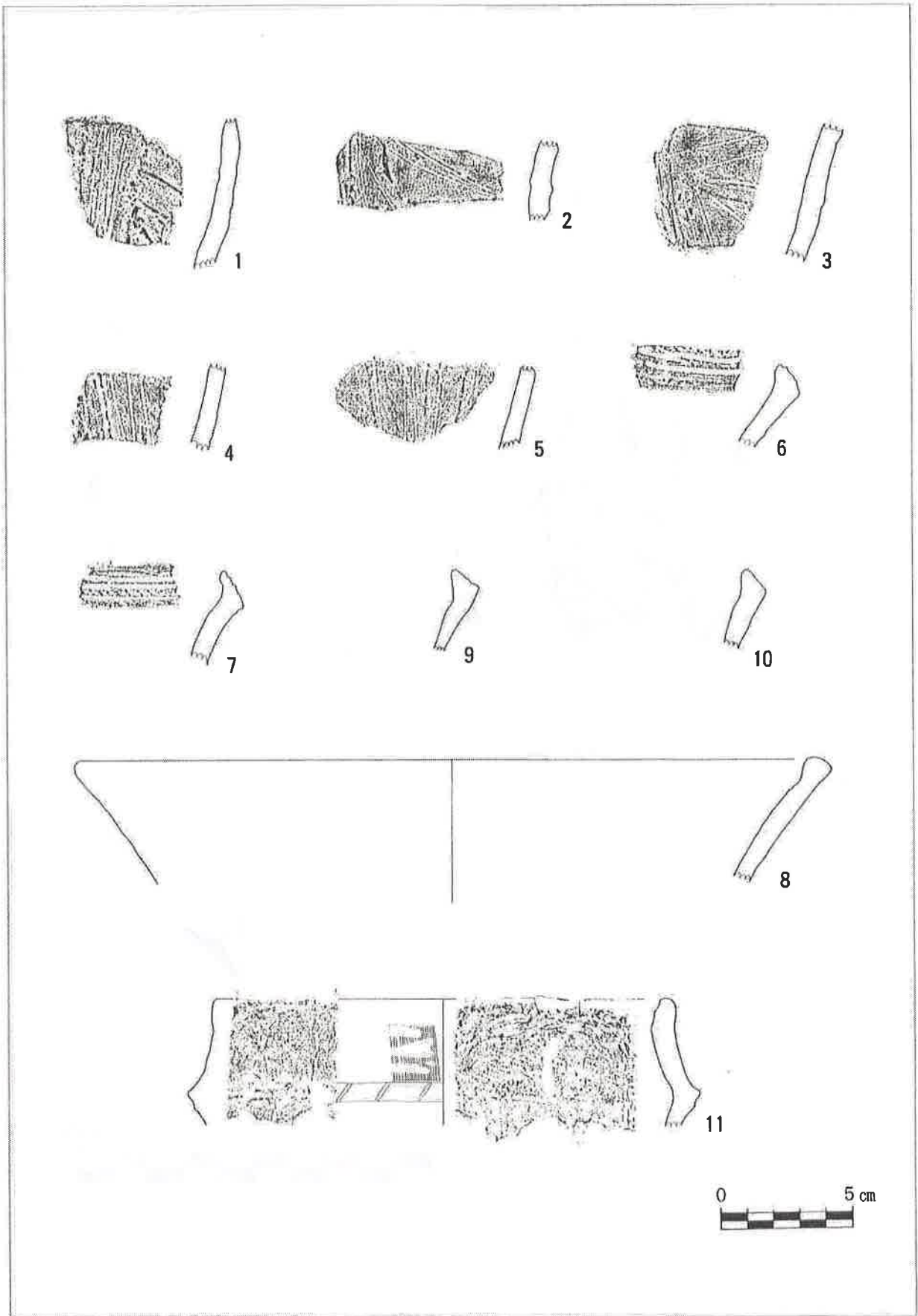
16は硅質頁岩の磨製石斧である。17・18は凝灰岩製の打製石斧である。19・20は石鏃である。19は先端部が欠損しているが、基部に抉りが入るものである。20は欠損した部分があるが、基部に抉りが入らないものと思われる。



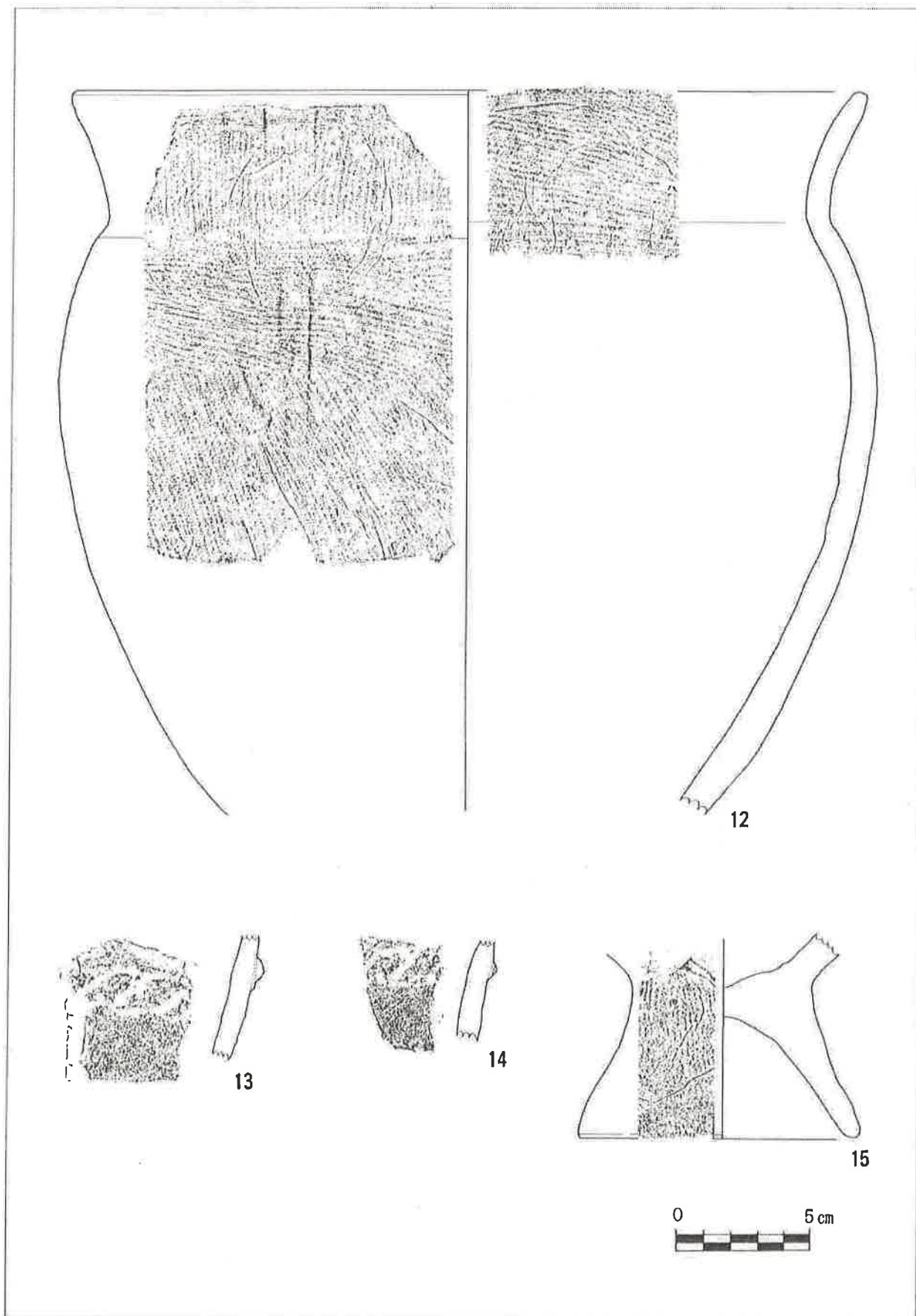
第4図 遺構配置図



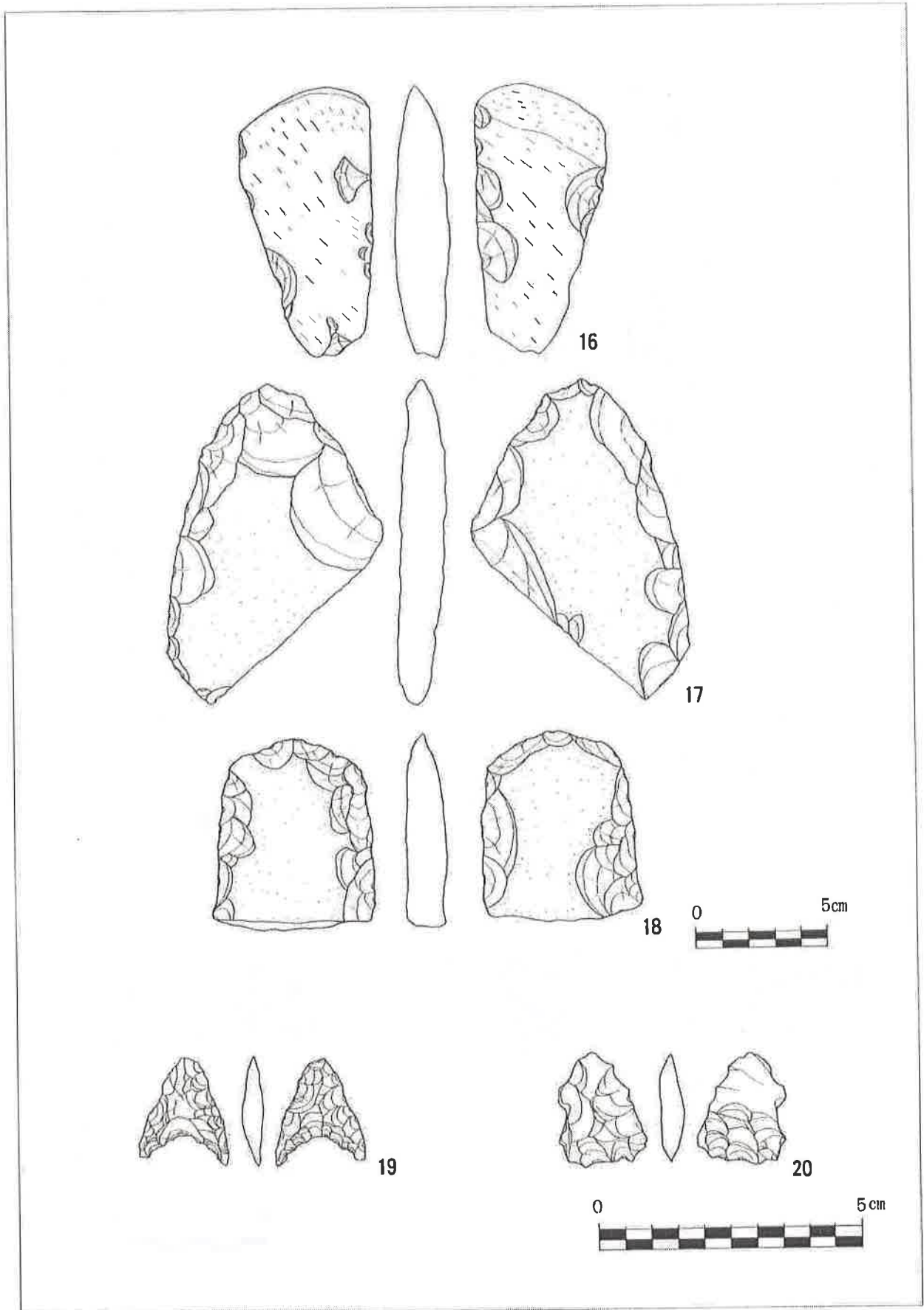
第5図 土器集中箇所実測図



第6図 I～Ⅲ類土器



第7図 IV類土器



第8図 石器

3. 土師器

21は口縁直径9.5cm, 底部直径5cm, 高さが3.4cmを図る耳坏で, 胴部から口縁部をつまみ上げている。また, 内面底部に円形の沈線が施してあり, 底部切り離しはヘラ切りである。22は口縁直径11cm, 底部直径5.3cm, 高さが4.6cmを測り, 底部切り離しはヘラ切りで, 21の耳坏と並んだ状態で出土した。23は皿で, 低い高台を貼り付けている。

24～30は坏で, 底部切り離しはヘラ切りで, 24～27は口縁直径11.0～11.8cm, 底部直径4.8～5.6cm, 高さが4.6～5.3cmで, 開きながらまっすぐ伸びる深い坏である。28～30は底部で, 底部直径4.4～5.4cmである。

31～57は碗である。31は口縁直径12.2cm, 底部直径5.4cm, 高さが6.2cm, 32は口縁直径11cm, 底部直径4.8cm, 高さが5.1cmで, 内湾ぎみに立ちあがり, 口縁部でわずかに外反する。33～38は口縁部で, 内湾ぎみに立ちあがり, 口縁部でわずかに外反する。39～56は底部である。39～54は体部下位を肥厚させることで, 高台状に見えるものである。また, すべてヘラ切り痕を残し, その大部分は, ヘラ切り離しの後, 軽くナデてヘラ切り痕を消している。55・56は高台付碗で, 高台の内・外面は, 横ナデで調整されている。

57～60は甕で, いずれも口縁部破片である。色調は淡赤褐色ないし淡茶褐色を呈し, 胎土は砂粒を多く含んでいる。調整は内面頸部下は, ほとんどヘラケズリされ, 口縁部は内外面ともナデである。57は外面胴部に格子目の叩きが見られ, 須恵器と同様の手法が見られる。

28・39は内側底部に油脂が付着しており, 灯明に使われたものと思われる。

47は, 底部に焼けた粘土が付着している。焼成のとき付いたものと思われる。

4. 黒色土器

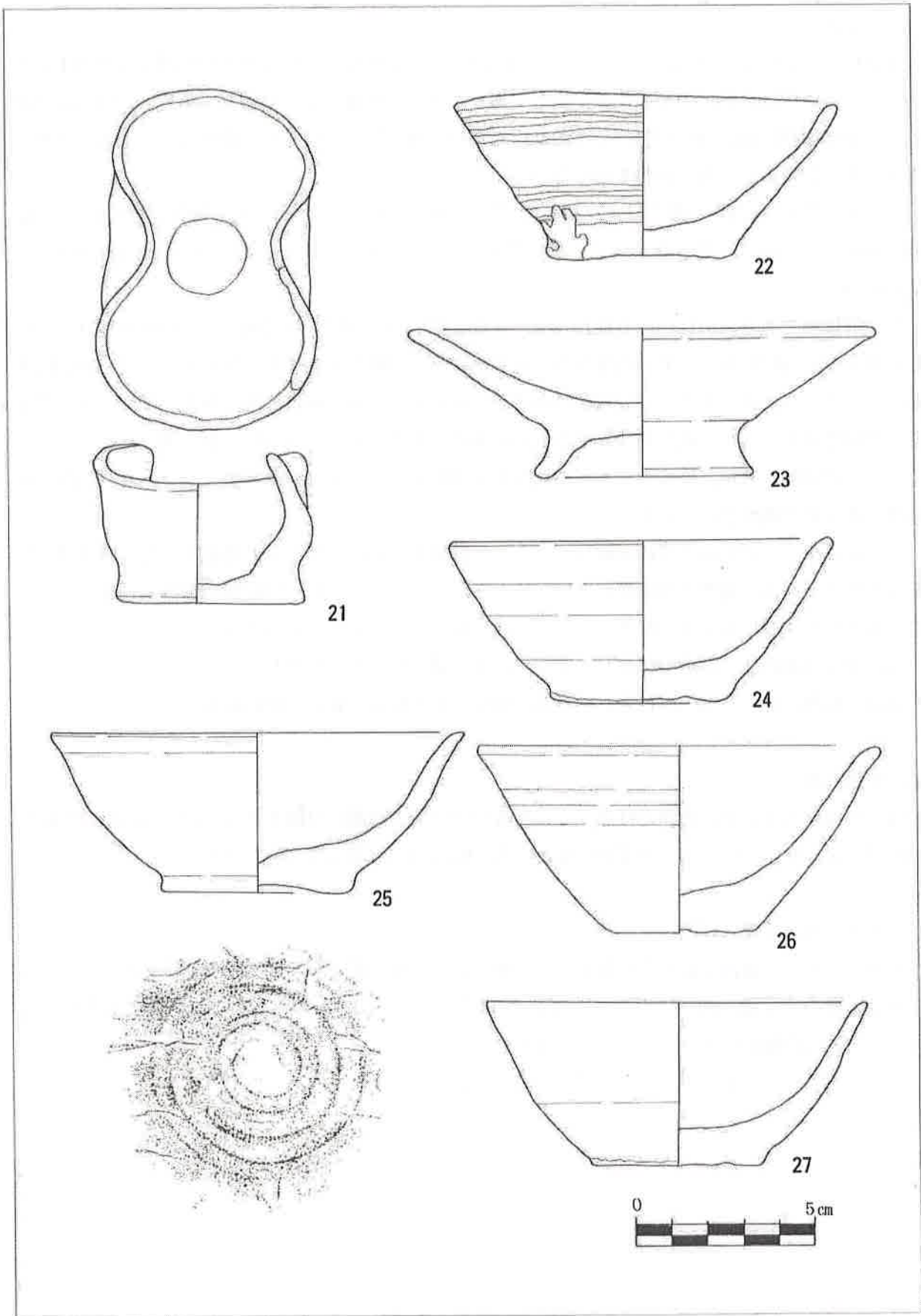
61～68は黒色土器で, 内側だけ黒くなったもの(内黒土師器)の碗である。61～67は口縁部破片で内湾する体部が, 口縁部でわずかに外反する。68は外方へ開く高台部である。

5. 墨書・刻書土器

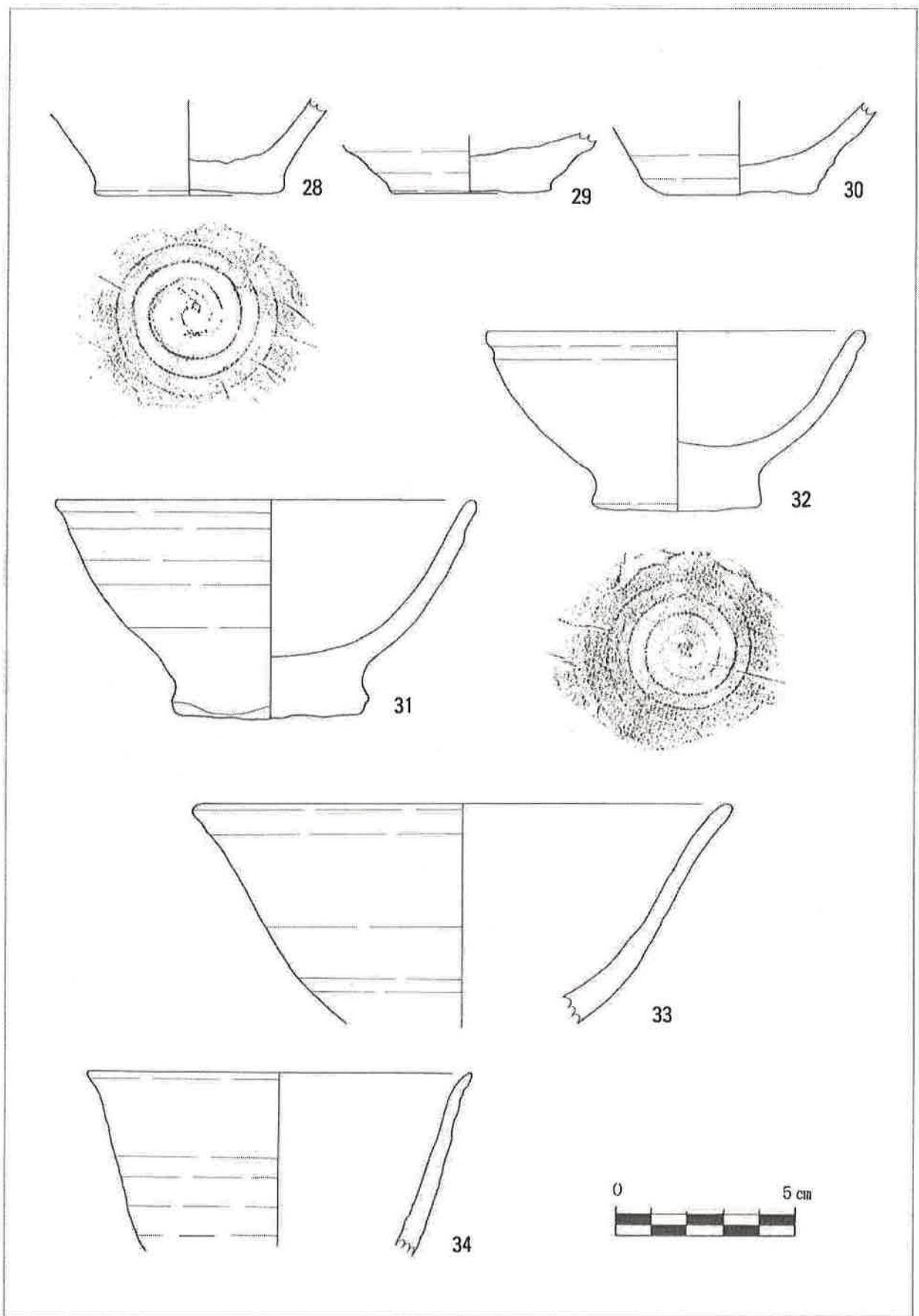
墨書土器6点, 刻書土器1点が出土した。69～74は墨書土器で, 75は刻書土器である。

墨書土器の文字は, 69は「十」と「万」, 70は「人」と「加」を組み合わせであると思われる。また, 69は高台部分にヘラによるキズがみられる。

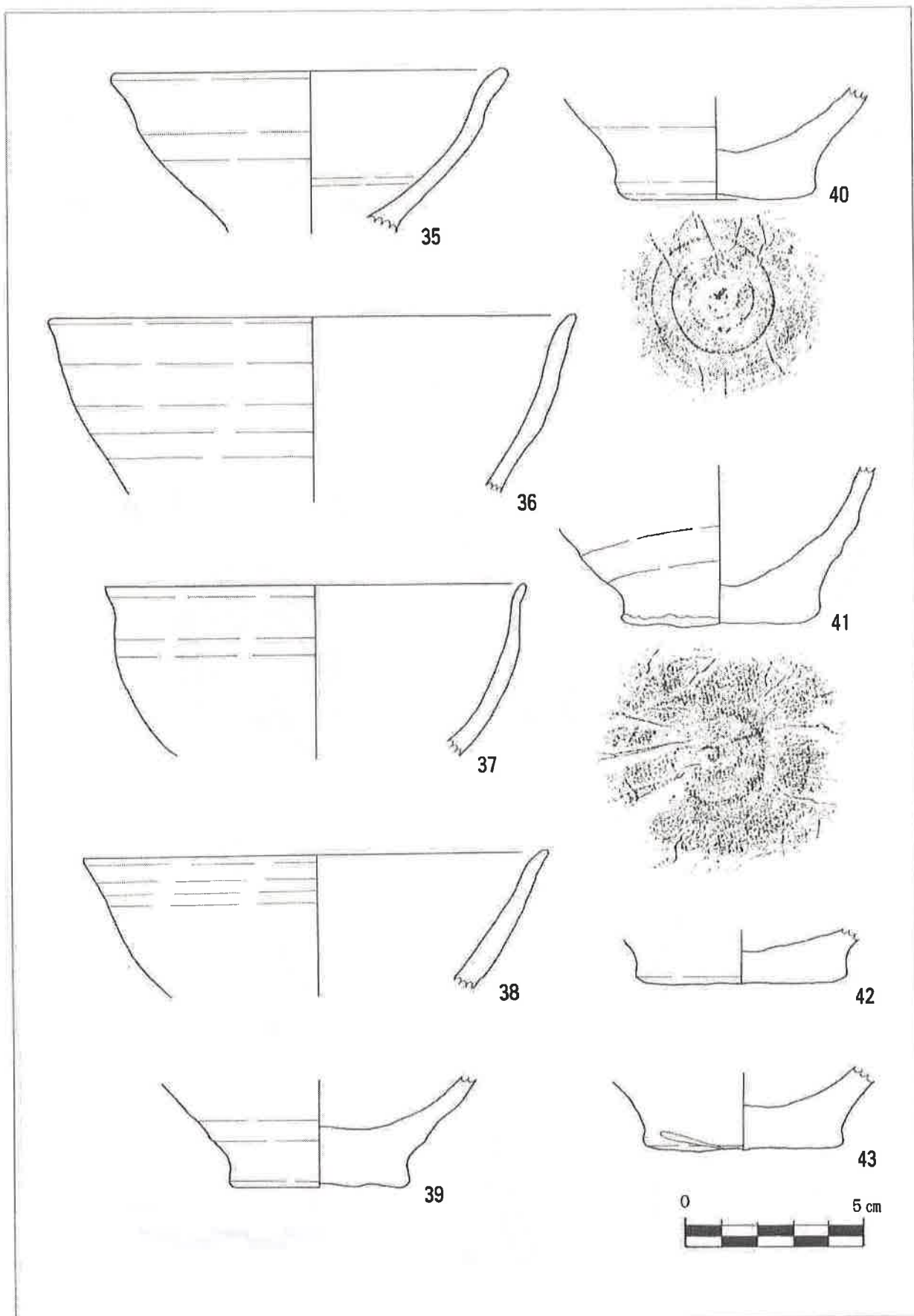
75は底部にヘラによる「+」の記号を刻んでいる。



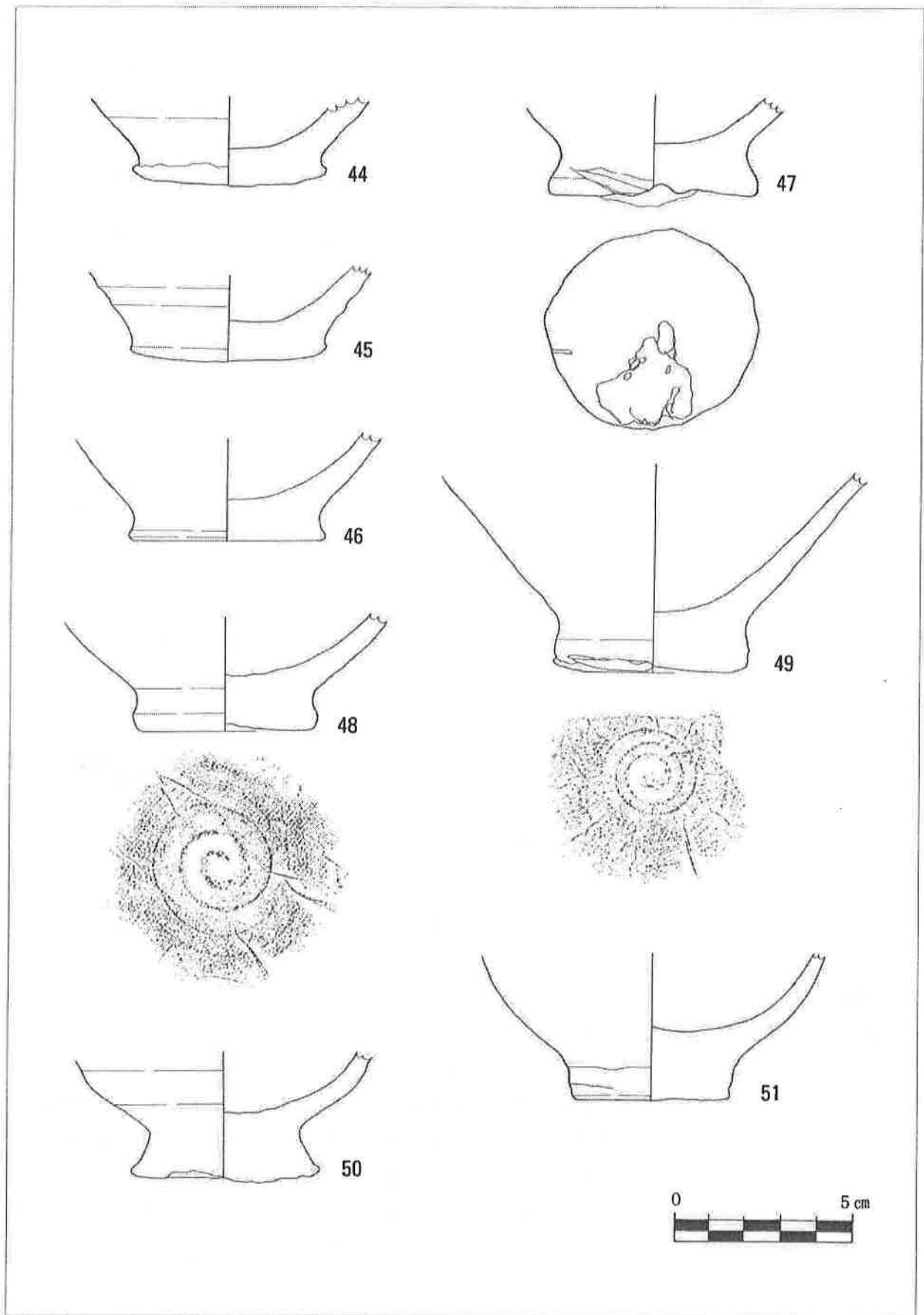
第9図 土師器 (1)



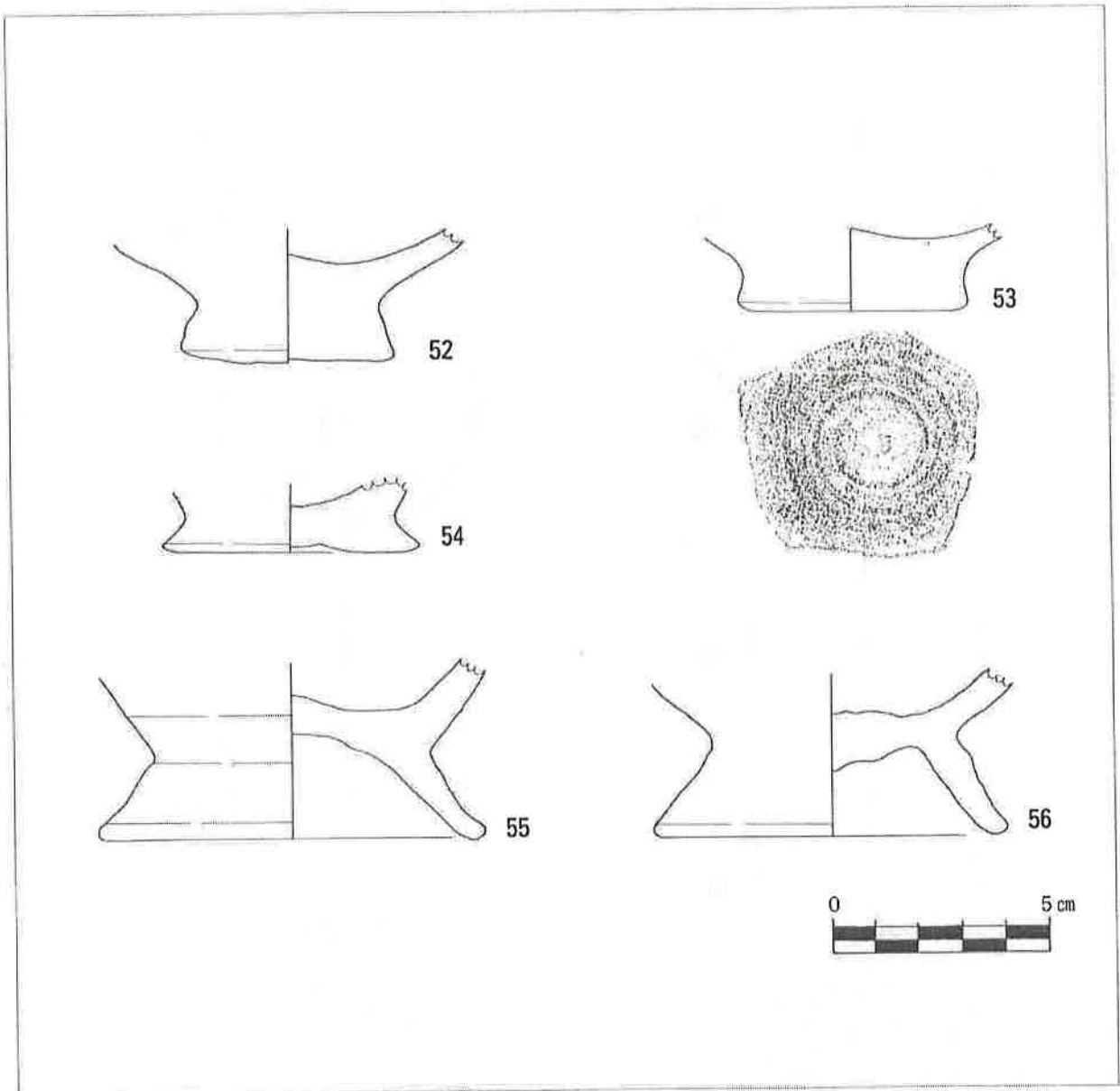
第10図 土師器 (2)



第11図 土師器 (3)



第12図 土師器 (4)



第13図 土師器 (5)

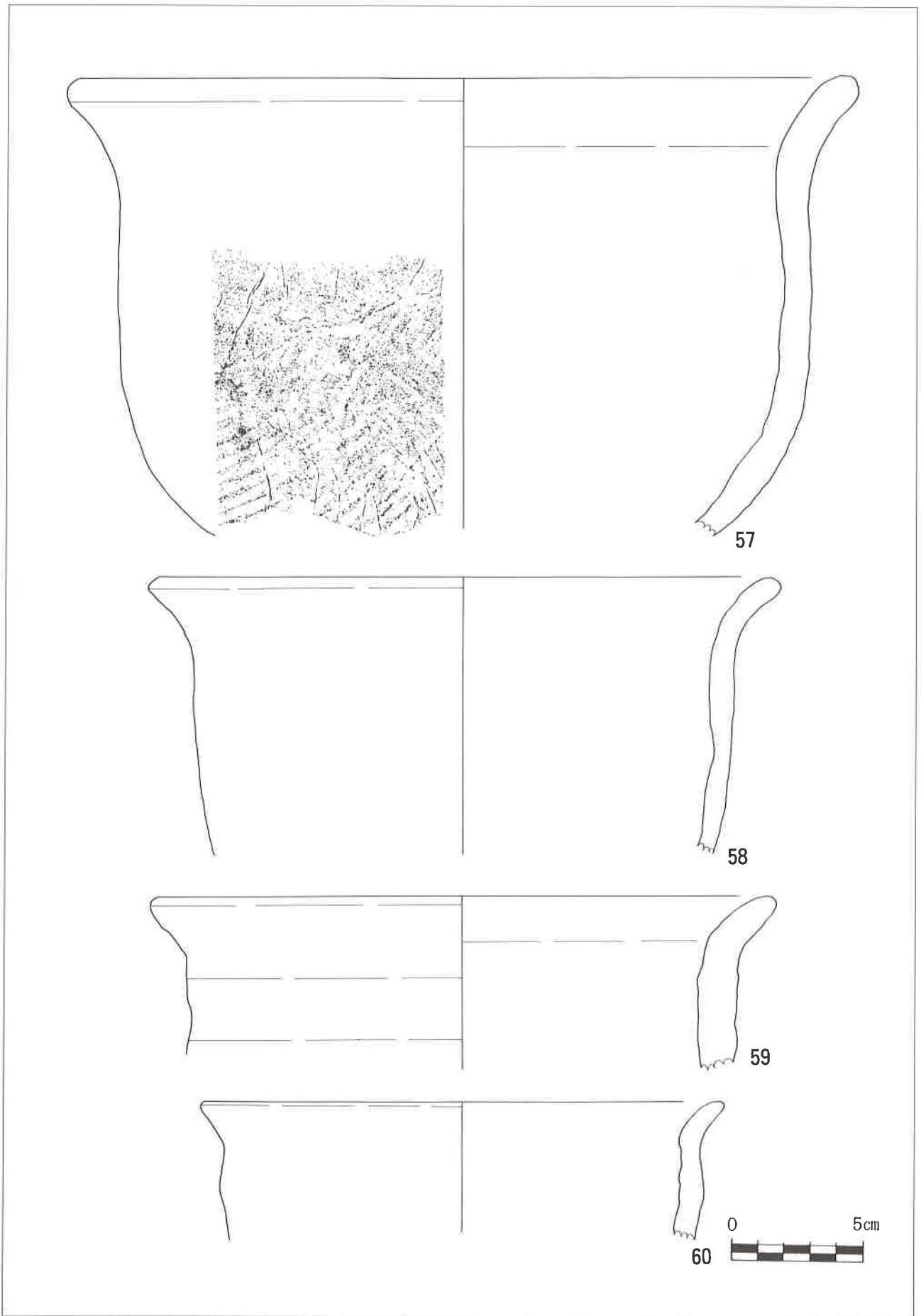
6. 須恵器

須恵器は壺と甕がある。76～81は壺である。76は口縁部である。頸部から外反し、垂直気味に屈曲し、さらに端部で大きく外反する。77～79は胴部である。77は自然釉で緑色を呈している。80・81は平底の底部である。81は底部内面に14本の襞が傘状に広がる変形の車輪文叩きが見られる。

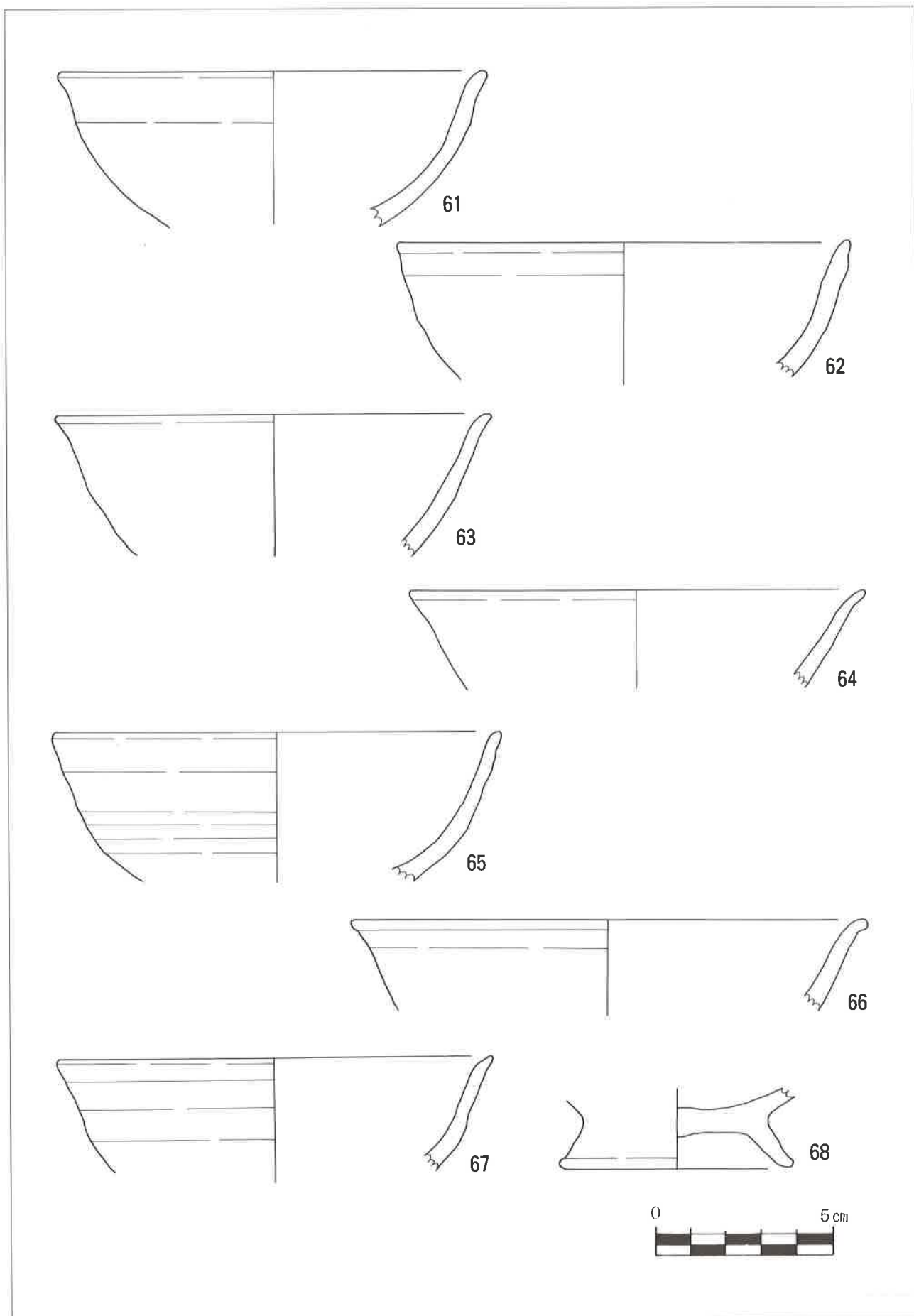
82～88は甕である。82は口縁部破片で、外面に平行線状、内面に同心円文の叩きである。83～88は胴部破片である。83～85は外面に格子目、内面に平行線状の叩きがみられる。

86・87は外面に格子目、内面に同心円の中心部に十の印をみる車輪文、平行線状と同心円文の組合せがみられる。88は外面は、格子目と平行線状の組合せ、内面は同心円と平行線状の組合せの叩きがみられる。また88は内面に研磨された痕跡がみられ、転用甕であると思われる。

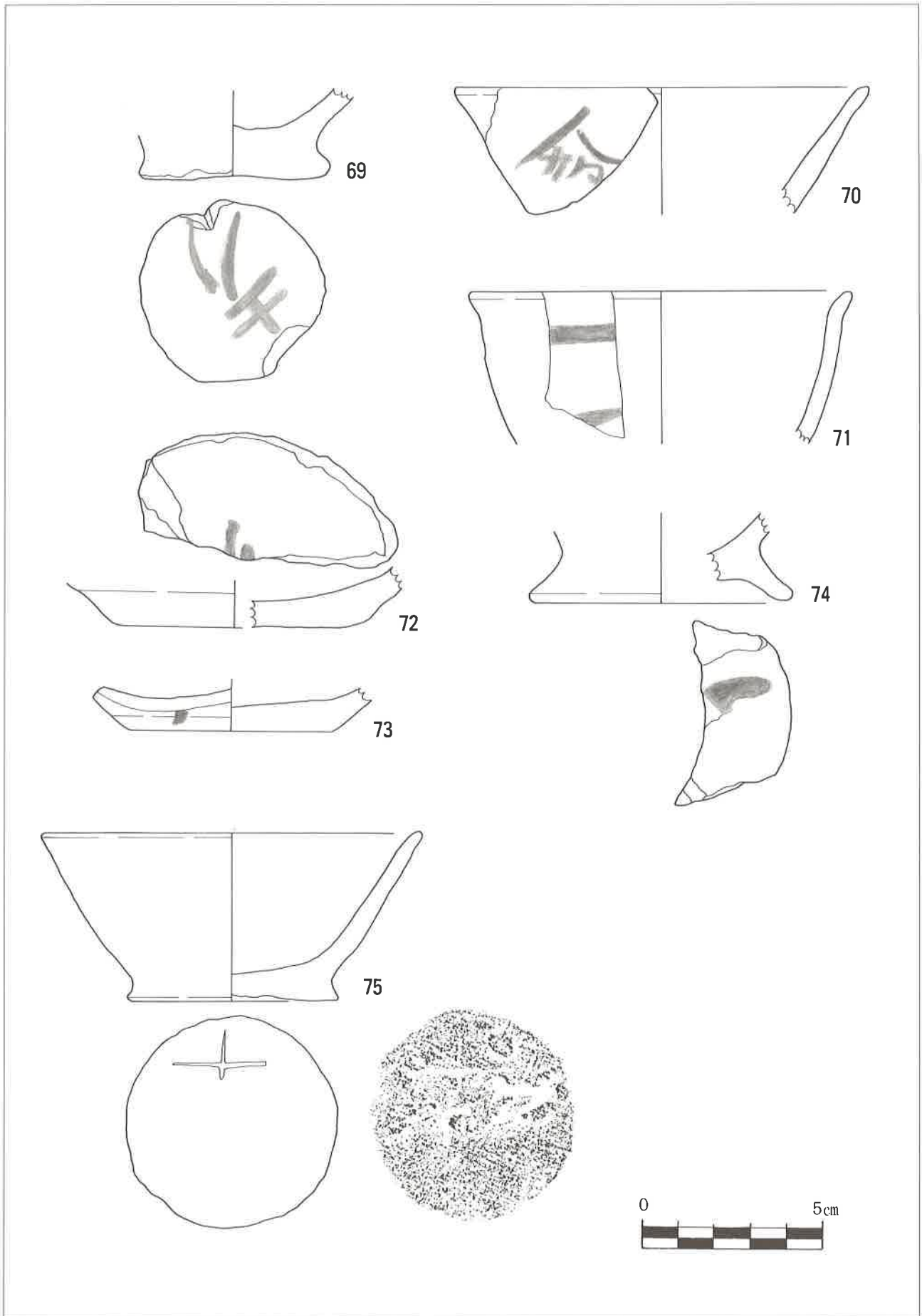
その他、図化されていない遺物で、内朱土器・滑石片・青磁器などが出土している。



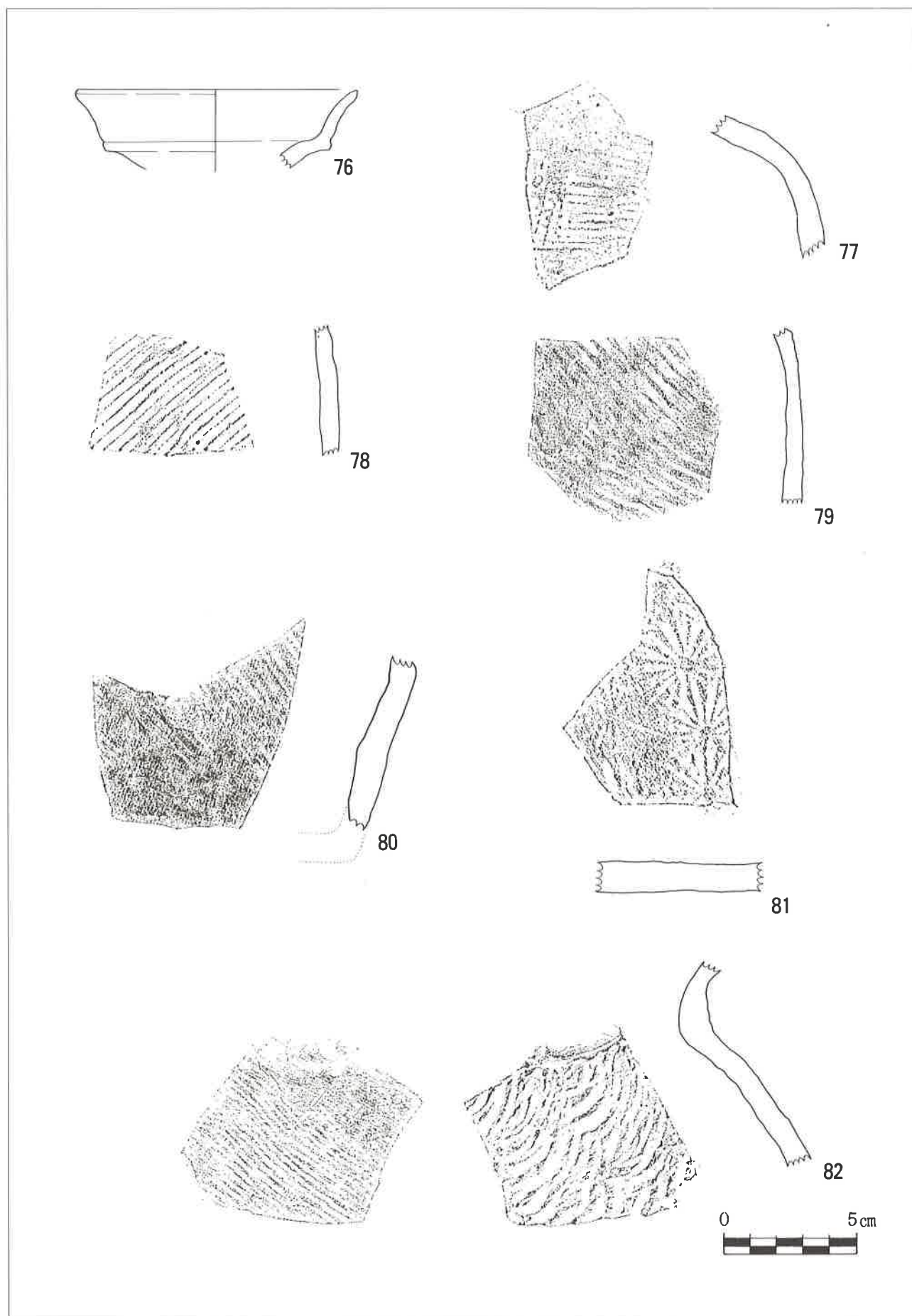
第14図 土師器 (6)



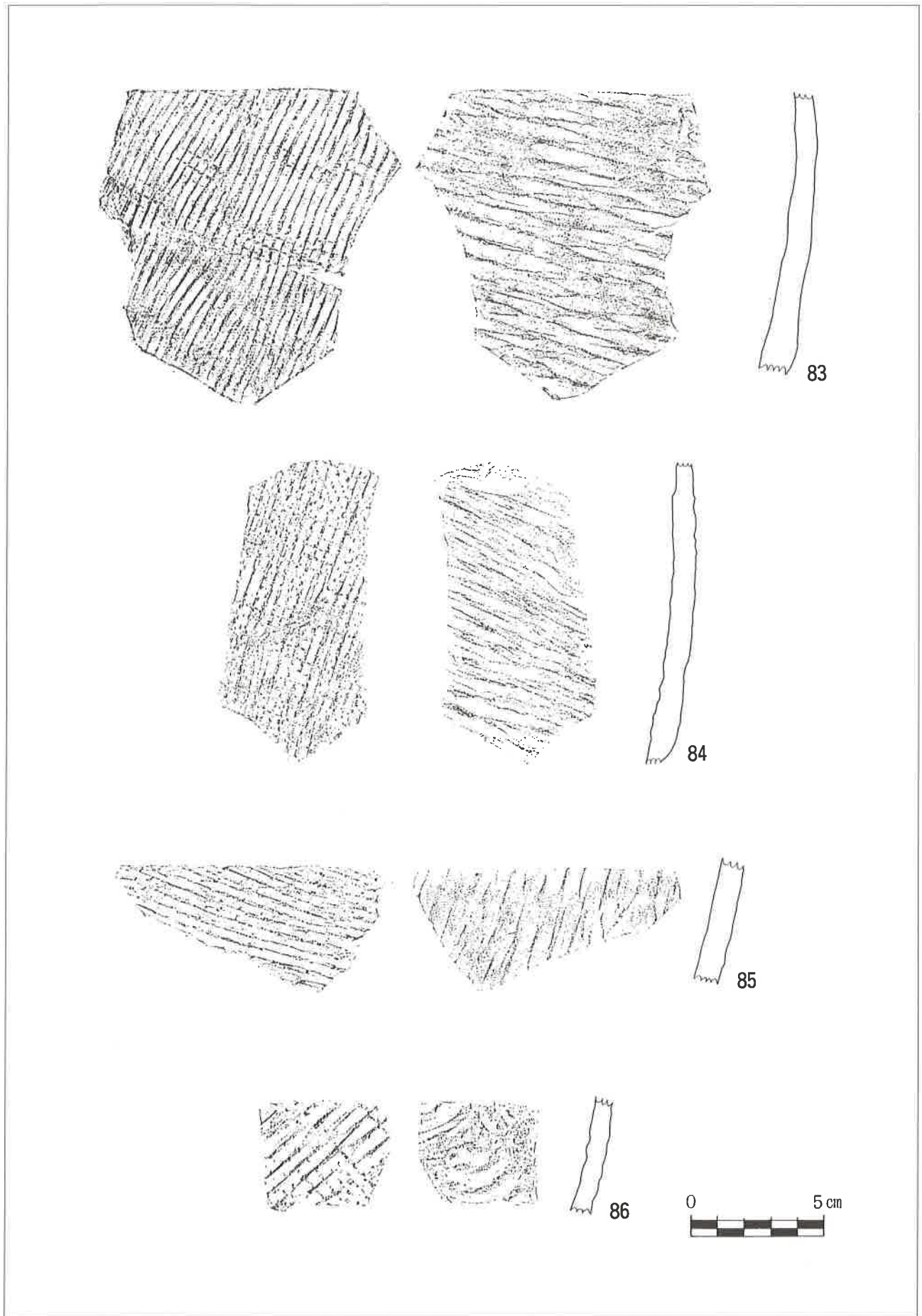
第15图 黑色土器



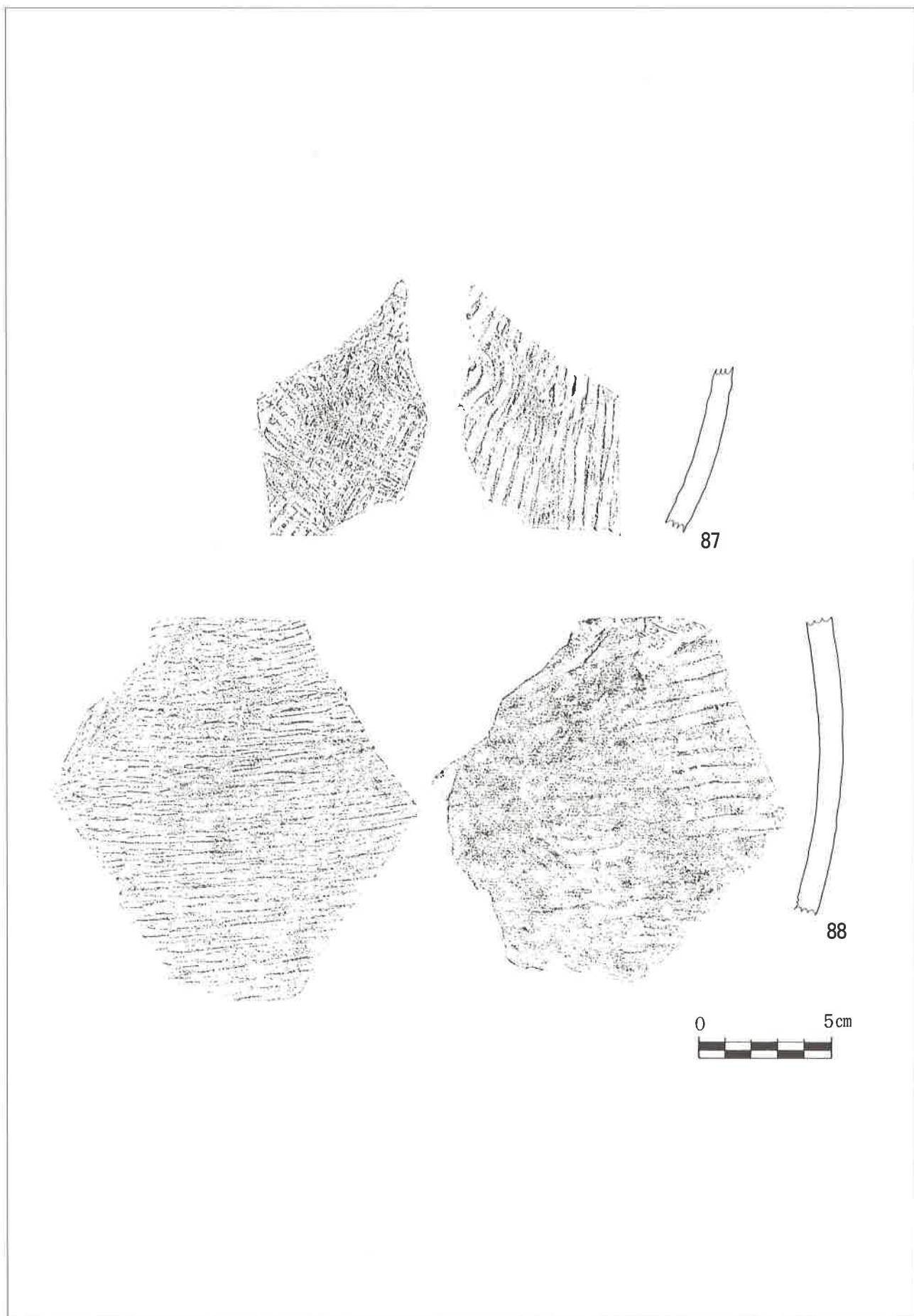
第16図 墨書・刻書土器



第17図 須恵器 (1)



第18図 須恵器 (2)



第19図 須恵器 (3)

第2表 出土土器一覧表

図	番号	建物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
6	1	885	Ⅱ	甕形土器	胴部	突帯・沈線	ナ デ	暗茶褐色	
	2	1009	Ⅱ	甕形土器	胴部	突帯・沈線	ナ デ	暗茶褐色	
	3	1126	Ⅱ	甕形土器	胴部	突帯・沈線	ナ デ	暗茶褐色	
	4	1008	Ⅱ	甕形土器	胴部	突帯・沈線	ナ デ	暗茶褐色	
	5	1007	Ⅱ	甕形土器	胴部	突帯・沈線	ナ デ	暗茶褐色	
	6	232	Ⅱ	鉢形土器	口縁部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	7	1343	Ⅱ	鉢形土器	口縁部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	8	1281	Ⅱ	鉢形土器	口縁部	ナ デ	ナ デ	黒褐色	
	9	1139	Ⅱ	鉢形土器	口縁部	ナ デ	ナ デ	黒褐色	
	10	1259	Ⅱ	鉢形土器	口縁部	ナ デ	ナ デ	黒褐色	
	11	243	Ⅱ	壺形土器	口縁部	刻目突帯	ハ ケ	淡赤褐色	
7	12	S1	Ⅱ	甕形土器	口縁部～胴部	ハ ケ	ハケ・ナデ	淡赤褐色	
	13	75	Ⅱ	甕形土器	胴部	刻目突帯	ナ デ	淡赤褐色	
	14	123	Ⅱ	甕形土器	胴部	刻目突帯	ナ デ	淡赤褐色	
	15	S1	Ⅱ	甕形土器	底部	ハ ケ	ナ デ	淡茶褐色	

第3表 出土石器一覧表

図	番号	遺物番号	層	器種	石材	長さcm	幅 cm	厚さcm	備考
8	16	1261	Ⅱ	磨製石斧	硅質頁岩	10.3	6.1	2.1	
	17	1156	Ⅱ	打製石斧	凝灰岩	12.2	7.8	1.8	破損
	18	1175	Ⅱ	打製石斧	凝灰岩	7.2	6.0	1.5	破損
	19	1177	Ⅱ	石 鏃	黒耀石	2.0	1.8	0.5	
	20	1180	Ⅱ	石 鏃	黒耀石	2.1	1.7	0.5	破損

第4表 出土土師器一覽表(1)

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
9	21	1352	Ⅱ	耳 坏	—	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	完形
	22	1351	Ⅱ	坏	—	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	完形
	23	283	Ⅱ	高台付皿	—	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	24	944	Ⅱ	坏	—	ナ デ	ナ デ	赤 褐 色	完形
	25	1360	Ⅱ	坏	—	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	26	1340	Ⅱ	坏	—	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	27	543	Ⅱ	坏	—	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
10	28	669	Ⅱ	坏	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	灯明
	29	645	Ⅱ	坏	底 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	30	1280	Ⅱ	坏	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	31	1357	Ⅱ	碗	—	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	完形
	32	770	Ⅱ	碗	—	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	完形
	33	1363	Ⅱ	碗	口 縁 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	34	1151	Ⅱ	碗	口 縁 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
11	35	1358	Ⅱ	碗	口 縁 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	36	1270	Ⅱ	碗	口 縁 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	37	319	Ⅱ	碗	口 縁 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	38	1303	Ⅱ	碗	口 縁 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	39	276	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	灯明
	40	1307	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	41	1043	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	42	767	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	43	1330	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
12	44	254	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	45	251	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	46	1316	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	47	350	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	底部に粘土附着
	48	1372	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	49	955	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	50	148	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	51	393	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	黒 褐 色	
13	52	621	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	黄 灰 色	
	53	1318	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	54	1073	Ⅱ	碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	
	55	1311	Ⅱ	高台付碗	底 部	ナ デ	ナ デ	淡赤褐色	

第5表 出土土師器一覽表(2)

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
13	56	983	Ⅱ	高台付碗	底部	ナデ	ナデ	黄灰色	
14	57	1361ほか	Ⅱ	甕	口縁部	ナデ・タタキ	ナデ	淡赤褐色	須恵器の技法
	58	1059	Ⅱ	甕	口縁部	ナデ	ナデ	淡黒褐色	
	59	1331	Ⅱ	甕	口縁部	ナデ	ナデ	淡赤褐色	
	60	526	Ⅱ	甕	口縁部	ナデ	ナデ	淡黒褐色	

第6表 黒色土器一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
15	61	1373	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	62	191	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	63	1053	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	64	46	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	65	1034	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	66	1209	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	67	1117	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	68	1058	Ⅱ	高台付碗	底部	ナデ	ナデ	黄灰色	

第7表 出土墨書・刻書土器一覽表

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
16	69	395	Ⅱ	坏	底部	ナデ	ナデ	淡赤褐色	
	70	362	Ⅱ	坏	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	71	144	Ⅱ	碗	口縁部	ナデ	ナデ	黄灰色	内黒
	72	106	Ⅱ	坏	底部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	73	171	Ⅱ	坏	底部	ナデ	ナデ	黄灰色	
	74	1313	Ⅱ	碗	底部	ナデ	ナデ	黄灰色	高台
	75	273	Ⅱ	坏	—	ナデ	ナデ	黄灰色	

第8表 出土須恵器一覧表

図	番号	遺物番号	層	器種	部位	調整(外)	調整(内)	色調	備考
17	76	1252	Ⅱ	壺	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐色	
	77	1297	Ⅱ	壺	胴部	格子目	ナデ	濃緑色	
	78	1088	Ⅱ	壺	胴部	平行線状	ナデ	白黄色	
	79	551	Ⅱ	壺	胴部	平行線状	ナデ	白灰色	
	80	479	Ⅱ	壺	底部	平行線・ナデ	ナデ	灰色	
	81	957	Ⅱ	壺	底部	車輪文	ナデ	淡赤褐色	
	82	237	Ⅱ	甕	口縁部	平行線状	同心円	暗灰色	
18	83	1111	Ⅱ	甕	胴部	格子目	平行線状	暗茶褐色	
	84	549	Ⅱ	甕	胴部	格子目	平行線状	青灰色	
	85	613	Ⅱ	甕	胴部	格子目	平行線状	灰褐色	
	86	799	Ⅱ	甕	胴部	格子目	車輪文	淡赤褐色	
19	87	1209	Ⅱ	甕	胴部	格子目	平行・同心円	淡赤褐色	
	88	1062	Ⅱ	甕	胴部	格子目	平行線状	灰褐色	転用硯

第5章 まとめ

ムシナ遺跡では縄文時代から中世までの遺物が出土した。

1. 縄文時代

縄文時代の遺物はⅠ・Ⅱ類土器で、それぞれ、深浦式土器、西平式土器に相当すると思われる、2種類の土器が出土しているが、出土数は少ない。

2. 弥生時代

弥生時代の遺物はⅢ類土器で、1点だけあり、刻目突帯の付いた壺の口縁部で後期のものと思われる。

3. 古墳時代

古墳時代の遺物はⅣ類土器で、成川式土器である。Ⅰ～Ⅲ類のものに比べると出土量は多く、土器集中箇所もこの時期のものである。

4. 中世

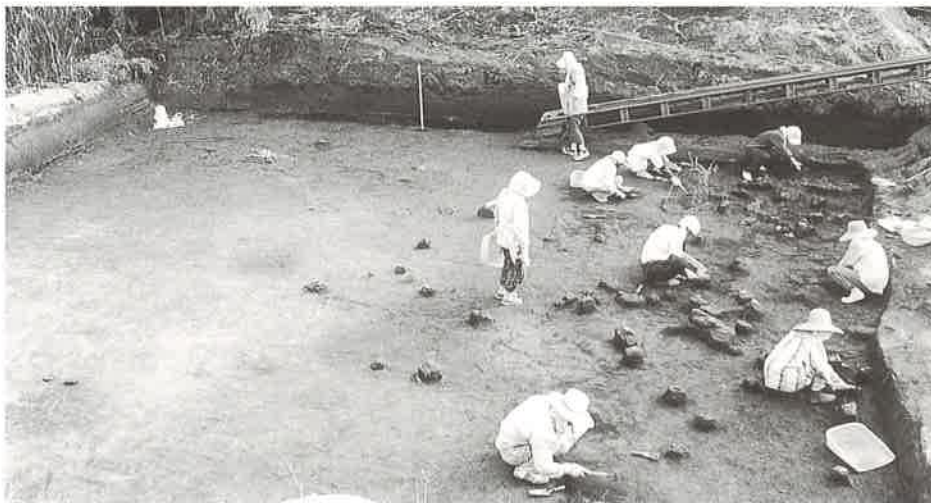
遺物はこの時期のものがほとんどである。土師器、須恵器の出土があるが、耳坏・墨書土器・転用硯が特筆される遺物である。土師器の形態などから9世紀初頭の遺物が中心であると思われる。

今回の調査では、多くの遺物が出土したが、調査範囲が狭く、遺構などの遺跡の性格は、はっきり確認することはできなかった。しかし、ムシナ遺跡は、鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査を行った、市ノ原遺跡第1地点と接しており、市ノ原遺跡との関連があると思われ、今後の報告に期待したい。

《参考文献》

- 「成岡・西ノ原・上ノ原遺跡」 <鹿児島埋蔵文化財発掘調査報告書 (28)>
鹿児島県教育委員会, 1983年
- 「成岡遺跡Ⅱ」 <鹿児島埋蔵文化財発掘調査報告書 (35)>
鹿児島県教育委員会, 1985年
- 「似非土師須恵器」 <横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学> 橋口 達也
横山浩一先生退官記念事業会, 1989年
- 「鹿児島県下の弥生土器」 鹿児島県考古学会, 1992年

圖 版



発掘作業風景



遺物出土状況



土器集中箇所検出状況

図版 2



耳環出土状況



遺構検出状況



東側土層断面



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



13



14

出土遺物 (1)

图版 4



12



15



16



17



18



19



20

出土遺物 (2)



21



22

出土遺物 (3)

图版 6



23



24



25



31



47

出土遺物 (4)



69



70



75

出土遺物 (5)



57



81



88

出土遺物 (6)

あ　と　が　き

まだ日差しの強い9月から調査を開始し、10月までの1月足らずの期間であったが、10月に入っても暑い日が続き、夏の調査のようであった。

狭い範囲の中で多くの遺物が出土し、作業が思うように進まない状況の中、すぐそばの自動車道の建設は着々と進み、周りの景色をどんどん変えていった。

そのような中で、がんばって仕事をすすめてくれる作業員のみなさんのおかげで、無事調査を終了することができた。また、調査後、引き続き整理作業をしてもらった作業員のみなさんに心から感謝し、結びのことばとしたい。

市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
九州電力株式会社鉄塔移設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

ム シ ナ 遺 跡

発行日 平成12年 3 月
発 行 市来町教育委員会
☎899-2192 鹿児島県日置郡市来町湊町3305番地
印 刷 (株) 朝 日 印 刷
☎890-0055 鹿児島市上荒田町854-1

